

1 血糖検体の保存状態による測定値の変化

2  
3 ○吉川康弘 積田智佳 熊坂肇 栗原惣一  
4 福山光和 大塚喜人(亀田総合病院臨床検査部)

5  
6 **【目的】**病棟で測定した血糖値と、検査室で測定した  
7 血糖値が乖離するという問い合わせを受けることが  
8 ある。この要因の1つとして、血糖用（NaF入り）採血  
9 管で検体を採取した場合でも、血糖値が低下するこ  
10 とが挙げられる。今回、血糖検体の保存状態による測  
11 定値の変化を検討したので報告する。

12 **【方法】**ボランティア5名より、NaF及びヘパリン入り採血管に  
13 て採血を行った。直ちに、1800 g 5分間遠心し、血糖値  
14 を測定した。その後、室温、4℃、37℃にて、全血の状態  
15 と遠心分離した状態でそれぞれの採血管を保存し、1  
16 時間、2時間、3時間、8時間、24時間後に血糖値を測定  
17 した。測定機器は、日立7180を使用し、試薬はピュアオト  
18 S GLU-R（積水メディカル HK法）を用いた。

19 **【結果】**全血の状態です室温放置した場合、NaF採血管  
20 であっても、徐々に低下し24時間後で平均約13%低  
21 下した。遠心分離した場合、NaF血は勿論、ヘパリン血で  
22 もかなり低下を抑制する結果となった。さらに全血  
23 であっても低温で保存することで、低下を抑えるこ  
24 とが確認された。

25 **【考察】**NaF 血で採血した場合でも、1時間室温にて  
26 放置した場合約5%の低下を認めた。NaFは、解糖系の  
27 エノラーゼの作用を阻害するため、血糖値の低下を  
28 抑制するが、完全に抑制できるわけではないため、低  
29 下したと考える。採血後、直ちに測定が出来ない場合  
30 遠心分離することは、血球と血漿が接する面積を減  
31 少させるため、解糖抑制上有効であると考え。さら  
32 に低温で保存することで、より解糖を抑制すること  
33 が可能であると考え。

34 **【結論】**病棟と検査室で血糖値を比較する場合、採血  
35 部位や病棟用血糖測定器の特徴を理解することは重  
36 要である。しかし、解糖阻抑制剤を用いた採血であつ  
37 ても保存により低下してしまうことを考慮した結果の  
38 解釈も重要であると考え。